

平成30年度第2回京都市市町村認知症施策連絡会開催結果

1 日時 平成30年10月10日（水） 午前10時20分～午後4時15分

2 場所 京都府医師会館3階 310

3 参加者 51名（内訳 市町村42名 保健所9名）

4 内容

（1）挨拶・オリエンテーション

（2）報告「運転適性相談窓口の設置と第1分類該当者等に係る地域包括支援センター等との連携について」

京都府警察本部 交通企画課 交通戦略室 滝清室長補佐

- ・今回の取組は、認知症のおそれがある（第1分類）と判定された方について、各警察署が面談を実施し、自主返納の特典を教示するなど、より丁寧な対応をするというもの。
- ・面談を行う中で地域包括支援センター等に連絡を希望された方については各警察署が地域包括支援センター等へ連絡するというもので、従来から行ってきた対応を仕組みとして確立するものであり、新たに何か負担を依頼するものではない。
- ・他府県に聞いていると、地域包括支援センター等への連絡は月に1回あるかどうかという頻度と聞いている。
- ・各警察署職員には認知症高齢者の特徴や地域包括支援センターの概要について講習を行っている。
- ・府警として地域の連携を進めていきたいので協力いただきたい。

（3）実践を通じた報告「本人ミーティングの実施について」

舞鶴市高齢者支援課 堀井主査

- ・平成29年度に市内2ヶ所の認知症カフェで実施。
- ・企画し、カフェ担当者と打合せをしたが、すぐに実施しようという話にならなかったが、最終的には、認知症カフェのあり方を考えている中で、従来から行っている作業療法だけでなく、本人同士が語り合いピアサポートの場にする必要があるのでは、ということで、本人ミーティングを実施することとなった。
- ・実施してみると、話が脱線したり、想定していた意見が出なかったということもあったが、相談をすることに対して、「(自分から)壁を作ったらあかん」というアドバイスが出るということもあった。
- ・認知症カフェ担当者としても、本人の意見を聞いてみて「そんなことを思っていたんだ」という気づきがあったと聞いている。
- ・「やってみたいこと」について前向きな意見が出にくかったが、そもそも「できない」と思ってしまうような環境にいるのではと感じた。
- ・出た意見をご家族に返し、各種事業に活かしていきたい。

宇治市健康いきがい課 角川主任

- ・平成28年度から京都文教大学を中心に実施。
- ・テーマ設定は当事者含む関係者で決めており、会場はテーマに沿った場所で行う。参加に向けた当事者への声かけは関係が構築されている医療機関の医師や認知症コーディネーターが行っている。
- ・成果として、京都式オレンジプランの評価や、当事者のニーズを活かしたお茶摘みや当事者の講演会を行ったこと、学生含む参加者の疾病観が変わったことなどがある。
- ・ミーティングでは、「本人が安心して来られる場所」であること、「本人にとって関係性のある人からの誘い」があること、「本人がグループミーティングの効果を実感できること」を大切にしている。

(質問) 参加者の年齢層は？

- ・70歳代後半～80歳代前半（舞鶴市）
- ・50歳代もおられるが、60歳代～70歳代が主。お一人で生活されている方や、家族の支援が必要な方もおられる。

(永田先生コメント)

- ・本人ミーティング開催ガイドブック作成には認知症当事者も参画しており、その願いは目次のページに記載している。
- ・実施にあたっては本人ミーティングをひとつの「事業」ととらえない方がよい。
- ・これまでは行政担当者等が企画し制度を整えてきたが、これからは構築した制度が本人のためになっているのか、意見を聞いてモデルチェンジする（組み直す）時期にさしかかっている。
- ・モデルチェンジするためには行政が方針を示す必要があり、全国では専門職でなく事務職が先頭に立っている事例がある。
- ・本人ミーティングに決まった形はないが、家族を前にすると本人が本音が言えないということがある。家族が優しさから「喋れないからかわいそう」と思ってしまう、言葉を奪ってしまうことがある。
- ・「言葉が出ない」と思いこまないことが大切。また、言葉が出なくても、うなづきや、同意から笑顔が出る方もおられる。
- ・「本音を言ってもいいんだ」という環境をつくることが必要。本人ミーティングを重ねると語る力が伸びる方が多い。1回目ですまく喋ることができなくても回を重ねることで変わることがある。
- ・馴染みの場である認知症カフェや地域密着型サービス事業所で行っている事例がある。認知症カフェとの違いについてよく聞かれるが、従来から設置している認知症カフェでも本人同士が語り合っているかを確認してみしてほしい。スタッフとばかり話しているということはないだろうか。
- ・やってみて終わり、ではなく、話し合いから少しでも改善していくアクションにつなげる必要がある。

(4) 当事者からの報告「なじみの集まりを、本人同士が語り合い、声を生かす場に
～育育広場の取組から～」

ほっと歓伝え隊隊長（日本認知症ワキンググループメンバー） 志度谷 利幸 氏
育育広場副リーダー（日本認知症ワキンググループパートナー） 志度谷 久美 氏
綾歌地区在宅医療介護連携支援センター 増田玲子 氏
綾川町地域包括支援センター 川崎 孝至 氏

＜本人ミーティングについて＞

- ・本人ミーティングは平成28年度から実施。志度谷さん夫妻を含めた企画会議の中で、「わくわくドキドキする会にしたい」という意見があり、「わくわくミーティング」という名称で本人ミーティングを行った。
- ・利幸さんは平成25年に当時は店舗屋としてお店を作る仕事をしていましたが、若年性アルツハイマー型認知症という診断を受けた。
- ・「どうしてもすぐに認知症ということオープンにしようと思ったのか」と聞かれることがあるが、当時は、なったのだから仕方ない、と思い周囲に話していた。
- ・症状が悪化している状況で、信頼できる病院を探したいという思いから地域包括支援センターにつながった。それから講演会等に行くようになった。

久美さん：本人としては、丹野さんとお会いしたり、当時どうでしたか。

利幸さん：自分がそういう病気になった時にはつらいんですね。今まで自分は一生懸命仕事をしてきたという自信があったから。それが急に、なんでもないことを忘れて。なにしようたん、いう状態になって、人間としてもものすごくつらかった。ですから、そこで助けてくれたことは本当にありがたかったですよ。だから、これから、自分ができることは何でもしようと思っております。それだけしか考えてません。だけど本当によかったと思っております。

久美さん：（わくわくミーティングで実施した）お好み焼きはどうしてはじまったん。

利幸さん：お好み焼きは単純なことで、親戚に近いところが駄菓子屋さんだったんですね。そこへアルバイトへ行って手伝いよったんですね。そのお好み焼きを焼くんがおもしろくなって、お小遣いもくれるし、ええとこだったんですよ。それから始まりですね。

久美さん：自分がお好み焼きは得意なもんですから、こんなもん喋るばかりして。そんなんよりお好み焼きやったら美味しいで言うたら、みんなが、私キャベツ持ってくる、誰々さんはネギ持って来て、小麦粉はどうするああすると、話がとんとん拍子に進んで、楽しい楽しいわくわくミーティングが決まりました。

- ・本人ミーティング実施後は「本人の声を活かそう会」というグループで話し合った中で、志度谷さんが「ほっと歓伝え隊」の活動に参画することとなった。

< 育育広場について >

- ・「育育広場」とは、「子育て支援施設きらり」で、認知症の本人とともに活動するグループ。「南かざし団地」をモデルとして認知症になっても住み慣れた地域で楽しくいきがいを持ちながら、安心して暮らし続けるための場作りと世代間交流のあり方を模索することを目的としたもので、認知症の人も認知症でない人も老若男女を問わず参加できるもの。
- ・「本人の声を活かそう会」で話し合っている中で、子育て支援施設の空きスペースがある、毎日通える場所にするため、雑草が生い茂る園庭を畑に変えてみたらどうか、といった意見が出て形になった。

利幸さん：(写真を見ながら) ついたてですね。みんなすぐ乗ってくるんですよ。工作が好きなんですよ。そういうことができると認知症が治ったらなおさらいいんですけどね。

久美さん：これがフルメンバーなんですけど、設計士さんもおりますし、監督さんもおりますし、税理士さんもおりますし、土木関係の方もおりますし、セールスの方もおりますし、それぞれ皆さんユーモラスなご主人が集まり、楽しそうにやっております。

利幸さん：認知症でずっとおったらダメになる場所ですけど、やっぱり仲間がおるということは大事なことで、モノを作ったりわいわい言うてどうこうして。悩んでええわけですよ。認知症の人にとって一番こたえるのは、自分が何をしようかも分からんよう状態になったらどんどん追い込まれるんです。そういう友達がおったら助けてくれるんです。それが本当にありがたかったですよ。ようこまでもったと思っております。ありがとうございました。

久美さん：この団地自体が10年くらい前から80歳くらいを集めて「いきいきサロン」を立ち上げて活動してたんですね。その下地があったからこそ、うちの主人がこうなった時に、次の世代の人がきた、楽しんでやろうやないかという話になった。このチームの中にうちの主人1人が認知症なわけやないんです。ただ、カミングアウトしとるのが主人だけで、他の人もいるんですけど、みんなそれを分かってても、普通のように、「これしまい」とは言わないんです。でもじーっと見よって、ぼーっとしとったら、「これしてくださいね」と普通に接してくれることが嬉しく感じるようです。

やっぱり人と交わって色んな話題にのって話せるいうところがいいと思います。認知症になって、お仕事は辞めたんですけども、また新しい違う友達が増えて。男の方って特にそうだと思うんですけど、お友達が職場関係だけなんですよ。だから、その時に、濡れ落ち葉状態でこられるより、今の主人のように、快適に過ごしていると、こちらも楽やなと喜んでいるところです。

- ・ 育児広場を通して、認知症になると生活は変えないといけないかもしれないが、その人らしさを取り戻すことの大切さを体感している。

利幸さん：今までは自分がそうなることによって、自分で自分をいじめよったんですね。それをある日分かったんですね。それから全然違いますね。自分がしたいことをやって、それで喜んでもらえたらありがたい。決してあほになったわけでも、認知症ということがひどい病気ということでもない。それを自分でなんとかする方法はいっぱいあるということですね。人間というものは強く強く生きていかなあかんということが分かりました。本当にありがとうございました。

(5) グループワーク「地元で本人ガイドを徹底的に活かそう」

認知症介護研究・研修東京センター 永田久美子氏

(質問) 本人ガイドを手にとった本人の反応は？

- ・ 誰が渡すか、渡す際にひとこと「一緒に頑張っていこう」と添えるかどうかで結果は異なる。今後のことについて不安を抱えておられるため、ポンと渡されるのではなく、本人ガイドを渡すことを通じて、味方がいるということを知ってもらえることが大切。
- ・ 診断直後の方は字を読める方も多い。待合室や市役所の窓口に置いているというケースがあり、そのような場で自分で見つけて連絡されるという方が増えている。自立する力がある方は資料を手にとることもあるため、居場所でガイドを使えるようにする、自由に手に取れるようにする、の両面で考えてみるとよい。

< Aグループ (乙訓) >

- ・ ガイドを周知するために認知症カフェやサポーター養成講座、もの忘れ検診、SOSネットワークの事前登録の際に使用できる。
- ・ また、図書館や病院待合室に置くことで市民に周知できる。

< Bグループ (山城北) >

- ・ まずは認知症に関わる全ての人がガイドを知る必要がある。
- ・ 本人、家族に向けては認知症カフェ等で認知症コーディネーター等が手渡すことができる。
- ・ 地域の方に向けては、認知症にやさしいまちにするため、自分が何ができるのかを考えるきっかけとするため、サロンやサポーター養成講座で使用できる。「認知症にならないために講座を開いてほしい」と依頼があることもあるが、ガイドを用いて、認知症でも地域で暮らし続けられることを伝えられればよい。

<Cグループ（山城北）>

- ・本人ガイドをしっかりと知ることが必要。また、本人がガイドを手にする居場所が必要。暗いトンネルにいる時にいきなり手渡されても内容は飲み込めない。安心できる場や仲間が必要。
- ・ガイドの置き場所は身近な図書館や医療機関、認知症カフェ等がよい。

<Dグループ（山城南）>

- ・まずは担当者が本人ガイドの意義を理解する必要がある。
- ・認知症カフェ、サポーター養成講座等で使用できる。冊子で配付するだけでは何のことか分からないので、ご本人の興味関心に沿ってお渡しするとよい。

<Eグループ（南丹）>

- ・行政や事業所等の内部研修で使用し、自分たちが理解する。個別訪問等でも使用できるが、まずはガイドの存在を広く知っていただくことが必要。
- ・数ページの概要版を作成して配付すれば費用はかからなくて済む。広報に本人の声をひとこと掲載することもよい。

<Fグループ（中丹）>

- ・行政や包括の窓口、病院、家族会、認知症カフェ等で使用できる。また、サポート企業等の勉強会、初期集中支援チームや地域ケア会議等でも使用できる。
- ・まずはガイドがあることを知ってもらえるようHP等で見ることができるよう環境を整えて周知することが必要。周知した後、勉強会や交流会でガイドを知ることが必要。
- ・認知症のご本人を知るツールとして、ケース会議等でも使用できる。

<Gグループ（丹後）>

- ・認知症サポーター、キャラバンメイト、相談窓口、認知症カフェ、医療機関等で使用できる。自分たちは自主的に活動いただけるように使用法を説明したり、周知ができる。
- ・そもそも、ご本人が気楽につどえる場づくりが必要。丹後版本人ガイドのようなものも作成できればよい。こういったものがあれば認知症でも生き生き暮らし続けられる地域になる。

<実践を通じた報告>



<当事者からの報告>



<グループワーク>

